

## 昭和・平成・令和、救急医のこれまでとこれから

国家公務員共済組合連合会浜の町病院

病院長 一宮 仁 様



このたび、知事表彰をいただくことになりました。

最初は、「私なんかが、いただいていいのか。」とも思いましたが、昭和51年に医師となり、平成、令和と、長年、救急医療に携わってきたことを評価いただいたものと考えています。

私の専門は外科ですが、研修医の頃から急患手術や救急病院での日当直で救急医療に関わっていました。駆け出しの頃は、CT、MRIなんてものはありません。患者さんを見て、触って、聴いて、五感で判断せざるを得ませんでした。結果がどうであれ、昼夜を問わず頑張ったことに感謝していただけた時代で、それこそが励みになっていました。平成の時代は福岡市救急病院協会の役員として、令和に入ってから福岡県医師会で救急・災害医療を担当して、地域での救急医療体制の整備に携わっています。

救急診療では、幅広い知識と視点で短時間のうちに病状を理解することが求められます。現在は専門性が優先される風潮で、救急医を目指す若手医師はわずかです。救急に携わると自ずと裾野が広がります。専門の道を進むにしても、広い裾野を持つ、そんな医師が必要と感じています。若いうちに救急医療に携われるような仕組みができることを願っていますし、そうあるべきだと思います。

医師の働き方改革も目前となり。医療資源が少ない地域では、救急医療を確保できるのか心配しています。地域の医療は、みんなで支えるという意識を持っていただきたいと思います。

このたびの新型コロナウイルス感染症は、災害にも例えられますが、先が見通せないところに災害との違いがあります。福岡県は、幸いにも東京、大阪のような事態にまではなっていませんが、救急医療や一般診療への影響もありました。県民の一人一人が感染を広げないという意識を強く持っていただくことが地域医療を維持することに繋がります。

今回の緊急事態宣言下での教訓を活かして、救急医療体制や非常時の医療体制のあり方を県行政の担当者の皆様と共に構築したいと思います。また、救急の電話相談として、#7119、#8000がありますが、まだまだ知られていませんね。もっと強くメッセージを出して医療資源を有効に利用して地域の救急医療を守っていただきたいと思います。